

反・子どもの貧困の実践から 学ぶもの

県立広島大学 田中聡子

2つの課題

- 子どもが貧困に負けない「力」はどのような支援によって生まれるか
- 実践で育む貧困に負けない「力」とはどのようなものであるか

反・子どもの貧困の実践

ミクロの実践 <そこに支援が必要であったから>

1) 江戸川中三勉強会

2) 釧路市高校進学プログラム「高校行こう会」

3) 京都市「中三学習支援事業」

4) 大阪市「子どもの家」事業

1)江戸川中三勉強会

背景 1980年代～

親の貧困⇒家庭の崩壊⇒子どもの人生に影響

実践 公務員ボランティアの実践

早急な**成果を求めない**

同じ時間、同じ場所、同じ顔⇒**信頼関係**

専門性(公務員ボランティア) 一歩踏み込む-本気で関わる

ケースワーカーは親以外の重要な「大人モデル」

2) 釧路市高校進学プログラム「高校行こう会」

背景 低い高校進学率(生活保護自立支援プログラム)

実践 NPO法人が運営 (NPO法人職員、ボランティア)

コミュニティハウス「冬月荘」における居場所

(集まる、住む、仕事をつくる)

⇒ 一緒に食べる。一人ひとりに役割がある。

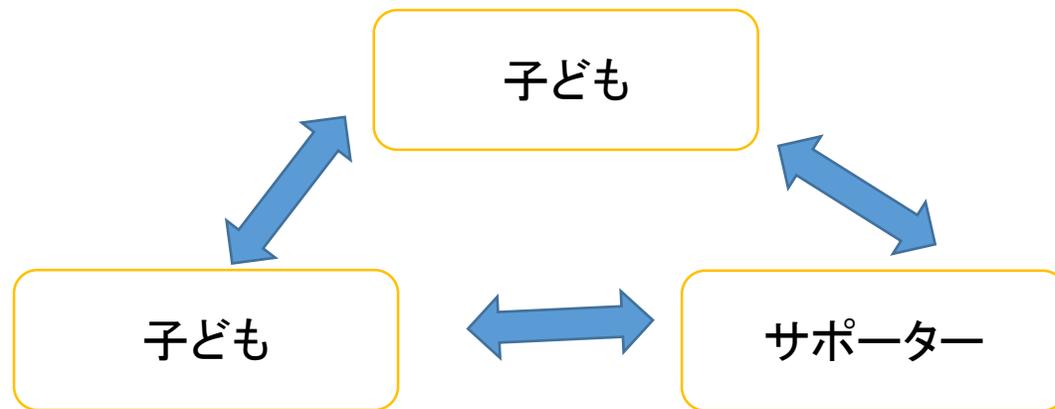
多様な大人と関係する。(職員、スタッフ、大学生)

身近な親以外の「大人モデル」に接する

3)京都市「中三学習支援事業」

背景 低い高校進学率 (生活保護自立支援プログラム)

実践 公益法人へ委託 — コーディネータとボランティア
子どもが次第に勉強するようにある



子どもは大人だけでなく他の
子どもを意識する
(居場所の効果)

弱みをみせる、依存できる⇒支援者
を活用することができる力を持つ

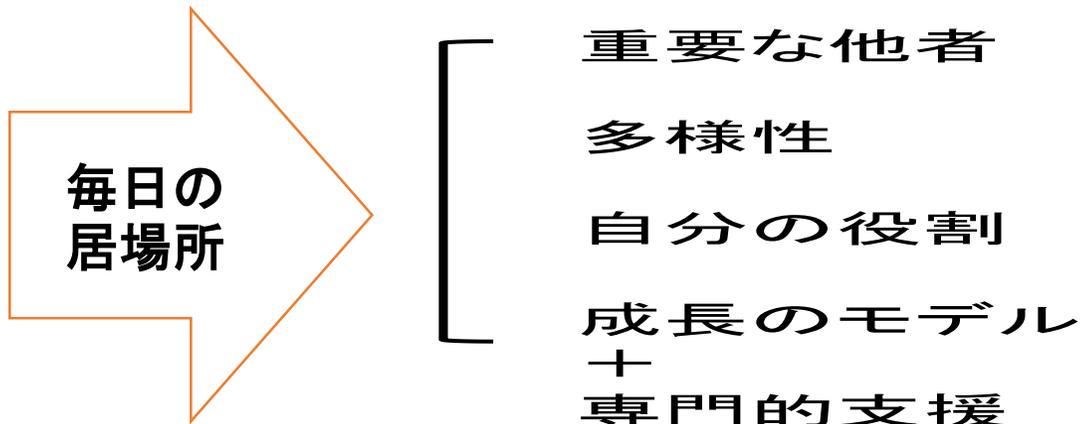
4) 大阪市「子どもの家」事業

研究方法 インタビュー調査

対象者 西成区に生活する ひとり親家庭の子ども

子どもの家 小学生～18歳まで

放課後の居場所 「自分が行きたい時にいつでも行くことができる場所」=待っている(相談できる)人がいる。



結果

1) 子どもが貧困に、負けない「力」はどのような支援によって生まれるか

- 子どもとの関係性の構築には「本気で向き合う」
本気で向き合う大人の存在
- 親以外の「大人モデル」ー 大学生、公務員、多様なボランティア
- 専門性の高い個別支援のプロセス

2) 実践で育む貧困に負けない「力」とはどのようなものであるか

支援者を活用する力

甘え・依存する

苦手な問題を解決する

生きる力

生活技術・社会の規範・家庭文化

意欲・努力

自分の将来を描く、進路に向かって
努力する

残された課題

実践の効果は何によって見るか
＜評価指標＞